会員だより

民具の思い出

安部　巌

民具に思う　若い若いと思っていたが、ふりかえってみたら、すでに六〇余年の歳月を重ねており、父も逝き、母も逝った。それにつけても子供の頃が遠い昔のように思われてならない。

六〇年前、庶民と呼ばれた私たちの祖先は何を願い、何を求めていたのだろうか。

心の奥底には、「質素でもいい、安定したくらしがしたい。又、安くてくらしに役立つものを求めたい」と願い、決して高価なものを求めようとはしなかった。

高価なものがいいと気付いていても、それは許されもせず、経済力もなく、高嶺の花であり、求めようとして求められるものでもなかった。だから安くて用をなすものであれば弱い経済力の中で買い求め、さらに経験を生かしながら役立つものを造り出しもした。

庶民がつくり出した道具は、それが生産用具であらうと、生活用具であろうと、今造り出されている用具の祖型をなすものである。つまり、祖先の人たちがつくり出した民具があったからこそ、今日の用具が誕生したのである。

なお民具には、老人の悲しみやよろこび、くらしの在り方などが秘められており、過去における未知の部分を解きあかしてくれるものが多い。民具保存の必要は、そこから生まれる。

しかし、民具はその用が終ったとき、また、あたらしい民具がつくられたとき、常に捨てられ、かえり見られることはなかった。

その傾向は戦後において著しい。生活様式の変化は、過去の民具を消滅させてしまったのである。今こそ、捨てられようとしているものの価値を認め、保存し、故人の営々努力の跡をさぐることは大切なことであろう。

母の糊刷毛　わたしの手もとに母の造った糊刷毛がある。古いダンボールで型をつくり、その間に馬のしっぽを切り揃えてはさみ、木綿糸で縫い合わせた粗末なものである。

昭和の初めごろであった。盆前や暮れになると、母はこの刷毛を使って家中の障子をはりかえた。客に見えないところには新聞紙を、客に見えるところには障子紙をはった。

いそがしそうな母の姿を見ながら、盆や正月が来るのを楽しみにまっていたのを思い出す。障子のはりかえが終ると、母はその刷毛を大切に始末し、またやって来る盆や正月のはりかえに備えた。

その時から五十余年の歳月が流れた。今のような物の多い時から考えると、信じられないような話である。

私にとってだいじな宝物であるこの刷毛はどんな意味をもっているのだろうか。

せんばと麥こぎ　庭のグミが赤くうれ、芍薬が咲き始めるころ、農家では麦扱ぎが始まる。天気のいい日、母や姉は麦を刈り、父や兄は穂のついた麦束にオーコをさしかついで帰る。持ち帰った束は納屋の中に積み上げておく。麦束は一尋（ひとひろ）のイイデでくくった大きさである。

麦をこぐのは祖母の仕事。庭においたせんばのそばに一束づつとり出し、一握りづつこいでいく。

「パリパリパリ」

扱ぎ落された麦の穂は千歯の向こう側に積っていく。祖母は麦をこぎながら

「今日は天気がいい。お日様が高いうちに早く乾かそう、うすく広げておけや、」

「うん」

私は祖母に手伝って庭一杯にこぎ落した麦の穂を広げた。

昭和一〇年（一九三五）ごろのことである。当時せんばは、大きな使命を持った農具だったわけである。しかし、戦後になってチェーン付きの脱こく機が発明されてから影をひそめた。今では史料館の片すみで時たま見かけるだけである。

木槌と畦豆植え　昔の石高は米と大豆の出来高合計できめられていた。大豆は米につぐ大切な穀物だったのである。畑地の少ない農家では、古くから田の畦に大豆や小豆を植えこみ、集約的に増産をはかっていた。

大豆の種蒔きには小さな木槌をつかった。田植前の畦塗りが終ったとき、新しくできた畦に植えこまねばならない。その頃はまだ畦がやわらかいため、植え穴堀りを失敗すると畦をこわしてしまう。だから木で造った小槌を使ってポンポンとたたけば、深さ四センチ位な穴がきれいにならんでいく。穴ができたらその中に種子を三〜四粒入れ籾がらなどで覆っておけばよい。田植の頃には大きな二葉をもたげてくる。

その後は、梅雨が明けた七月ごろと八月の末ごろ、二度ほど畦草取りをすれば、稲刈りと同時にじゅうぶんに実った大豆を収穫することができた。畦土には肥料分の多い田土が使われているため、大豆作りの条件が備わっていることを農家の人たちは知っていたのである。

からうすと焼米　昭和の初めごろ、私の村では二種の焼米をつくっていた。一つは春の種籾からつくり、今一つは秋の稲刈りのころ、未熟の籾からつくったものであった。どちらも商品にならない質の悪い籾を煎って実をとり出したものだが、農民にとってはたいせつな食べ物であった。

農家では、種籾をカマスに入れて水に漬け、芽が出はじめてから整地された苗代に蒔いた。発芽をよくするためである。そのとき、たまたま種籾が残ったりすると、それを焼米にした。焼米は籾を鍋で煎り、それを（からうす）で搗いて籾がらをとり除いたものである。

唐臼は足踏み式であった。前方に石臼。手前に杵の支え石があり、その上に木で造った長い杵をのせ、人が支えの部分を中心にして足を前後におき、調節をとりながら穀物を搗く民具のことである。杵の先には石のおもりがくくりつけてあった。普通は軒下の壁にそって置かれていた。人が杵の上に上ったとき、安定を保つため、家の壁につかみ棒がとりつけてあった。

「一ッ二ッ三ッ四ッ……七八、七九……。」

百数えて一休み。焼米を食いたいばっかりに一生懸命だったのを思い出す。

味噌桶と牛　盆がすぎ、秋風が野辺をかすめるころ、

「志高に牛を連れに行こうか」

父のことばである。

亀川町・朝日村・石垣村が別府市に合併した昭和一〇年前後のころ、志高湖周辺の原野は採草場でもあり、牛の放牧場でもあった。

田植が終った七月の初めから八月にかけて、志高には農耕に疲れた牛が放たれていた。

みそを入れた桶を持ち、父と一緒に野路をすぎ、湖畔にたたずむ。森かげから数十頭の牛が群をなして駆けて来る。

こわいような気持ちだった。

しかし、自分のところにくるのはうちの牛だけだった。牛は自分の主人を忘れていなかったのである。

首をかいてやると、頭を高くあげて寄りそって来たものである。

戦争のころ、牛にとって志高は天国だった。戦後になると、農機具が急速に改良され、役牛（えきぎゅう）にとって変った。

農家の牛は激減し、志高から牛の姿が消えた。

いま観光客に埋められている志高。この繁栄はいつまで続くのだろうか。